

ヒステリーの事例研究

—社会・文化精神医学の立場から—

中村 剛

Tsuyoshi Nakamura :

A Case Study of Hysteria ; from the Standpoint of Socio-Cultural Psychiatry

<索引用語 : ヒステリー, 社会・文化精神医学, 県民性>

< Keywords : hysteria, socio-cultural psychiatry, prefectural traits of personality >

I. はじめに

神経症の発現や病像は、社会・文化的背景と密接なかかわりをもつ。イム, Latah, Amokなどのculture-bound syndromeは特定の民族と地域に限って発生するし、第一次世界大戦中のヨーロッパでは両軍の兵士にヒステリーが多発した。

先進文化圏では、今世紀初頭からヒステリー病像の変遷が問題にされており、多くの著者が演示的な症状の減少を指摘している^{2, 11, 12)}。新垣¹⁾は昭和6年から同34年までの29年間についてヒステリー病像の時代的変遷を調査し、①ヒステリー精神病は戦争末期から終戦直後にかけて一時的に増えたが、転換ヒステリーは戦前から一貫して減少傾向にあり、心氣的訴えを主とするものは戦後急速に増加の傾向をみせていること、②客観的に捉えられる症状、たとえば視野狭窄、けいれん、失立失歩、角膜咽頭反射消失などは減り、振戦、吐気、心悸亢進、呼吸困難感、全身倦怠感、浮上感など自律神経支配領域の主観的な症状が増加する傾向にあることを見出している。このように、神経症、とりわけヒステリーは、ある社会・文化環境とそれに捕らわれながら生活する人々の生きざまを鋭敏に反映する病理事象である。

さて、北陸に住む筆者に課せられたテーマは社会・文化精神医学の立場からみたヒステリーの事例研究である。北陸地方、ことに富山県では農耕社会の伝統がいまだに根強く残っている。家は直系男子を中心に団結が求められ、冠婚葬祭をはじめ、家の成員にかかわる重要な問題に対処するとき、親族会議の結論を無視するわけにはいかないという。

本稿では、自己の進路をめぐる親族の圧力に屈した結果、ヒステリーを発症した一事例と、同様な状況下で自己の意志を貫徹した対照事例とを紹介し、両者のたどった軌跡の異同について若干の比較検討を試みたい。

II. 富山県の地域性と県民性

事例を紹介する前に、富山県の地域性について簡単に言及しておきたい。

雪深い北陸地方(富山・石川・福井の三県)は年間を通じて降水量が多く、それに伴い日照時間も全国で最も短い(「気象庁年報」昭和57年)という、まことに陰うつな土地柄である。戦後の高度成長期に新産業都市の指定を受けた地区もあるにはあるが、伝統的な産業基盤は稲作中心の集約

的農業にあり、それはなによりも住民の意識の底を流れる農耕社会的思考形態に色濃く反映されている。また宗教感情は強固で、浄土系仏教に帰依する人が多く、「真宗王国」の名は現在でも揺るがない。

このような均質的風土を背景に、質実剛健、堅忍不拔の精神が北陸人の共通特性とされているが、三県の県民性をたどった俚諺に「越前詐欺・加賀乞食・越中強盗」（貧乏のどん底に落ちたとき、それぞれの県民がたどるであろう道筋）というのがあるように、三者の間には意外に大きな差異が認められるのである。

NHKが行った日本人の県民性に関する調査⁵⁾（以下、NHK調査）と政府の統計資料を参照すると、富山県民はほぼ次のような特性をもっている（表1参照）。

NHK調査では富山は山口、福島、宮崎、徳島、愛媛とともに日本の伝統的価値観を残すという意味でもっとも強い特徴を示す県の一つとされる。

人々には権威を尊重する気持ちが強く、たとえば個人よりも公益が優先する（2位；以下、括弧内はNHK調査の全国順位）と考える。また禁欲的で自己抑制に徹する。暴力を振るうこと（3位）、夫婦以外の性的関係はどうしても許せない悪いこと（2位）であり、自分が主張すべきことでも、不利になるときは黙っている（1位）し、多少自分の考えに合わなくてもみんなの意見に合わせる（3位）という人が非常に多い。

しかし、富山県民は背をかかめじっと耐えながら、胸中に強烈な活力を秘めている。黙っているのは「不利になるのを恐れていること」で眼前の、それも衣食住に直結した危機に瀕すれば断然行動に移る。「越中強盗」はその辺りの譬なのであり、近代社会運動史上画期的な米騒動も越中の女性にとっては決して例外的な偶発事ではなかった。

昔から売薬に代表される出稼ぎなど、裸一貫からこつこつと働いて大を築く富山県民の勤勉力行の精神は有名であるが、今日でも、「生活の心配

表1 富山県民の意識調査（NHK調査より）

設問番号	設 問 の 内 容	順 位
1	今住んでいるところは、住みよい所だと思っている	3 (16)
10・C	多少自分の考えに合わない点があっても皆の意見に合わせたいと思う	3 (40)
10・E	本来自分が主張すべきことがあっても、自分の立場が不利になる時は黙っていることが多い	1 (15)
13・C	隣近所の人とのつき合いは多い	3 (34)
15	今の世の中では、実力のないものがおいてゆかれるのはやむをえないことだ	1 (6)
16	人間には優れた人と、そうでない人がいるものだ	1 (6)
18	男と女では、全体として能力に差がある	1 (3)
24・B	「富山」県の人々のものの考え方には、他の県の人々と違った特徴がある	2 (17)
27・A	（今住んでいる）市、町、村の政治に満足している	3 (10)
27・B	（今住んでいる）市、町、村の政治は、自分たちが動かしているという感じをもっている	2 (37)
29・C	公共の利益のためには、個人の権利が多少制限されてもやむをえない	2 (41*)
36・B	生活の心配がないとしても働きたい	3 (26)
38・B	暴力をふるうことは、どうしても許せない悪いことだ	3 (44*)
38・C	夫婦以外の性的関係は、どうしても許せない悪いことだ	2 (43)
39・D	この世の中のどんなものも、人の心も、すべて滅びやすく変りやすいものだ	3 (16)
40	仏教を信仰する	1 (6)

富山県民が、47都道府県中3位以内の高率で肯定した設問の内容を表示した。いずれも全国平均に比べ有意に高い。なお、()内は隣県石川の順位で*印は全国平均に比べ有意に低いことをしめす。

がないとしても働きたい」(3位)と思う人が多い。全国1位の持ち家比率85.1% (「国勢調査報告」総理府統計局, 昭和55年)は彼らの勤儉貯蓄して無駄のない生活ぶりが生んだ果実といえよう。

勤勉な県民は、また現実的な生き方と割り切った人間観をもっている。「人間には優れた人とそうでない人がいる」(1位),「男女には能力に差がある」(1位),「実力のないものがおいてゆかれるのはやむをえない」(1位)を肯定する人は全国でもっとも多く,「受験競争は子どもの能力をのばすのに必要」(4位)とみる人も多い。

県立高校の定員を職業科7, 普通科3の割合にした富山のいわゆる七・三体制は、就職のための勉学というその現実優先の合理主義が論議を呼んだこともあった。ついでに言えば、この県では県立高校普通科の生徒には修学旅行が許されていない。「商業科は商業活動を、工業科は工場の現場を見学することで修学の意図が達成できるが、普通科生徒には、旅行によって修学するにふさわしい場がないから」と、こんなところにも合理的発想が顔をのぞかせている。

禁欲的で勤勉な生活態度と現実を直視した合理的な生き方をもってしても、遠い以前、富山の人々の生活は決して恵まれたものではなかった。その一因は河川の氾濫である。富山県には「川千本」と呼ばれるほど急流の大河が多く、融雪期や梅雨期にはしばしば大洪水を起こし、人々は水との戦いに苦労を重ねた。

明治の初め石川・富山の県境はめまぐるしくかわったが、石川県時代に越中側が猛烈な分県運動を展開した背景には水害復旧予算に対する不満があったといわれている。水を治めて灌漑に利し、古くは加賀百万石の苛斂誅求に耐え、暮らしを支えるために人々は協働に励み、連帯を強化していったのである。その伝統はNHK調査にも表れている。まず「富山県の人々のものの考え方には、他の県の人々とは違った特徴がある」(2位)とするものは沖縄に次いで多く、「自分を富山県人だと思う」(4位)人も高い率で存在する。したがって、県民性に強い特徴のあることが住民自身によ

て自覚されて県人意識の強さに連なり、それは富山県人会の強固な団結力に具象化されているのである。また、種々の悪条件にもめげずに、「今住んでいる所は住みよい所だ」(3位)と思い、「今住んでいる市、町、村の政治は自分たちが動かしている」(2位)という感じをもち、「(その)政治に満足」(3位)している人が全国的にみてもきわめて多い。これは、人々の日常生活の場である地域社会に対する理屈抜きの強い愛着心と、おらが地域の問題に積極的にかかわろうとする気概とを示すものである。

富山県では、血縁・地縁の人間関係は非常に重要視される。家庭では「ひとりひとりが好きなことをして過ごすよりも、家族の団らんを大切にしたい」(5位)し、男女はそれぞれ「自分の父母を手本に生きてゆきたい」(8位)と思っている。こういう考えが反映してか、一世帯当たり人員は山形県に次いで多く、高齢者のいる世帯比率も全国3位であり(「国勢調査報告」総理府統計局, 昭和55年), したがって老人ホーム普及率は全国平均の1/2に満たず、47都道府県中の最下位である(「厚生省報告」厚生省, 昭和58年)。また、「親戚には信頼できる人が多い」(4位),「隣近所の人との付き合いは多い」(3位),「隣近所の人には信頼できる人が多い」(5位)などから、富山県民の親戚や隣人との親密な交流ぶりがうかがわれる。

以上要するに、富山県は血縁・近隣の人間関係から県のレベルに至るまで濃厚な同胞意識に貫かれ、伝統的価値観の支配する、特色の強い県の一つである。人々は自己を抑制して権威を尊び、他者を意識して日々その生活を律し、よく働く。

そして、こうした社会の中でわれわれが神経症を通してかいま見るのは、住民の特性の一部が拡大した形で展開される家族力動にほかならないが、次節ではその辺りの問題を具体例についてながめてみたいと思う。

Ⅲ. 事 例

以下にヒステリーの事例(A男)を紹介するが、

これに一人の健常者を対照事例（B男）として追加する。両者はともに本家の長男で境遇が似ているうえ、大学への進学に際し、進路の選択をめぐる家族や親族と対立した経験があるなど、生活史にも共通した面をもっている。

なお、プライバシー保護の観点から、両例の記述に多少の改変を加えることを許していただきたい。

<事例> A男 男子

A男の父親は裕福な農家の長男であったが、祖父の時代に零落し、一家は家屋敷と田畑を売り払って富山県西部に位置する町に移り住んだ。父親はこの町の運送店に勤めた。彼は普段は控えめでほとんど自己主張などしない人であったが、アルコール嗜癖があり、毎夜のように酔っては裕福な農家の惣領にあるはずの身をかこち、母親に乱暴をはたらくほか、時には1週間ほども勤めに出ずに昼夜を分かたず酒びたりになることもあった。このような状態はA男が生まれてから以前にもましてひどくなっていったという。A男は2人兄弟の兄として生まれた。弟とは3歳違いである。幼いころのA男はおとなしく、なにかにつけてすぐにびくびくする神経過敏な子どもでもあり、不器用で身辺処理の自立が遅れ母親によく甘えた。父親には一応なついているようであったが、顔色をうかがい、夜になると玄関の脇に母親と自分の履物を用意して「母ちゃん、ぼくいつでも逃げれるよ」と言ったりした。

家庭環境には恵まれなかったが、小・中学校を通じてA男の学業成績は常に上位にあり、とくに作文は小学校のころから得意でよくコンクールに入選したりした。また読書を好み、部屋中を本でいっぱいにし、ねだるものは本ばかりであった。

中学2年の秋、父親は急性心不全で死亡したが、A男は「片親がないような顔をしたくない」と言い、かえって勉強に精を出し、母親の手伝いも積極的に行った。中卒後、A男は公立高校に入学したが、この時は「母子家庭だからすぐに働きにでるべきだ」と、父方の叔父たちの反対にあっている。高校でのA男は学業成績はまずまずで、学級委員に選ばれるなど、適応状態も悪くなかったが、帰宅後はもっぱら読書に耽り、将来戯曲作家になることを夢見るようになった。高卒後の進路については、母親は教師になることを前提にして自宅通学可能なC大学の受験を承諾したがA男は

自分の夢を実現しようとひそかに関東のD大学文学科を受験し、双方に合格した。驚いた母親の要請で早速親族会議が開かれたが、母子家庭の長男が家を離れて戯曲作家を志すなどということは親戚の大人たちにはとうてい容認できぬことであり、集まった人たちの心理的強制の下で彼はD大学への入学を断念せざるを得なかったという。

C大学に入学したA男は教養課程を終了し、専門課程に移行したころから胸部の強い圧迫感と呼吸困難の発作に襲われるようになった。発作は授業中に起こることが多かったが、これに加えて、大学のキャンパスを歩いていると建物が突然自分に向かってのしかかってくるような異常感覚に見舞われるようにもなった。そのため、A男は卒業までに長期間を要することになるが、家に居るときは自室にこもり年に数篇の戯曲を雑誌に投稿していた。ところが、留年3年目ころからそれまでおとなしかったA男の言動が変化しだした。すでに専門学校を卒業して就職している弟に暴力を振るい、「一人で金をためこんで家でも興す気であるのか」と言ったり、母親に対して「(C大学に在籍した)この数年間のブランクを返せ。100万円出して東京へ戯曲の勉強に行かせるのなら許してやる」と怒鳴り散らす。しかし、平静な時には、「女の細腕で一家を支えるのは大変だろう」と母親に慰めの言葉をかけるといふ優しい一面もあった。そこで、粗暴な時のA男の状態を弟は「ムカワレがきた(祖先の霊が戻ってきた)」と表現しており、このようなA男の状態には二重人格のそれと一脈通ずるところがあった。

予想されたとおり、A男との治療関係の維持は容易ではなかった。初め、彼は親と親族を口汚くののしり、教職については理論と実践の背反を厳しく批判していたが、しだいに自己の未熟さと依存傾向に気付くようになり、「ぼくはまるで中学生の登校拒否だ」と自嘲の笑いを浮かべるようになった。しかし、家庭での態度はあまり変わらず、戯曲作家への夢は衰えないため、母親は治療者と相談の結果、彼の独立独歩を促すという願いを込めて東京への遊学を認めることにした。A男の上京を前に母親の「ひとに頼るばかりの幼稚な子がうまくやってゆけるでしょうか」という言葉が印象的であった。

<対照事例> B男 男子

B男は富山県東部にある村に農家の長男として生まれた。実父はB男が3歳の時に病死したが、B男の家

が本家であるために実父の弟（同胞10人中の三男）が義父となって後を継ぐことになった。B男には妹が3人いるが下の2人は義父の子である。

幼いころのB男はやや気が弱く、内向的であったが、小・中・高校を通じて学業成績は優秀でスポーツもよくし、クラス委員にたびたび推されもした。B男は父親が義父であることをまったく知らず、ごく平凡な少年時代を過ごした。

ところが、高校生になったB男は自身にとって人生の転機となるような体験をいくつか重ねる。まず、高校2年生の春、彼はたまたま入手した住民票の保護者の欄に義父と記されてあるのを見て激しい衝撃をうけ、その一方で妹たちに厳しい父が自分には寛大なわけが分かったような気がしたという。ついで、この年の夏、B男の所属する卓球部が姉妹校である県外のE校と行った合同合宿を契機に、彼はE校のF子と交際を始め、やがて2人は互いの家へ遊びに行き来するようになった。しかし、F子の住所が特別な地区にあることを知った大人たちによって2人の仲は裂かれ、この交際は禁じられてしまった。また、B男の部落には彼が物心のついたころから肢体不自由のために悲惨な生活を送っている一家族があり、それを取り巻く村人の態度にそのころ彼はようやく疑問を感じ始めていた。

多感な青春前期における以上のような生活体験は鮮烈な記憶となって今もB男の心に残っている。そのころの彼は家庭、学校など、およそ自己の行動を制約するようなすべてのものに逆らい、期末テストに白紙を提出するなどといった自虐的な反抗も試みている。しかし、彼はしだいに冷静になっていった。そして未熟な自分を顧みるとともに、自分の自由な意思によって生きる人間として、将来は社会の一隅を照らす存在になりたいと思うようになった。

大学進学に臨んで、彼は関東のG大学で社会福祉を専攻しようと考えたが、ここで親族の猛反対にあう。小学校長の職にあった父方の叔父は、家屋敷と田畑の維持管理は本家の長男の使命であり、それには教師にしくはないとして、地元のC大学を半ば強制し、ほかの親族もこれに同調した。しかしB男は遂に屈せず、義父のとりなしもあって、一応彼の希望はかなえられた。大学でのB男は勉学に精を出す一方で未解放部落問題などのフィールド・ワークにも参加し、積極的に知識を吸収した。このような勉学姿勢が評価されたく、B男は主任教授から卒業後、研究室に残るように勧められた。彼は喜んでその勧めに応ずることにし

たが、これを知った郷里の両親の狼狽ぶりは並大抵のものではなかったという。旅慣れない両親がうち揃ってなんども下宿を訪ね、B男の帰郷を懇願するに及んで、彼もやむなく両親の意に従ったが、村に帰った彼を待っていたのはやはり抜きがたい血縁の絆と以前と同様の処世訓であった。前出の校長はH市役所職員採用試験の願書を持参した。その試験を拒否はしなかったものの、大学で得た知識をケース・ワークに活かしたいと思っていた彼はひそかに隣県の私立総合病院にも願書を提出しておいた。H市役所からの採用通知を破り捨て、病院のケース・ワーカーになった彼は現在の仕事に生きがいを見出している。

A男とB男についてそれぞれの家族と親族が描く将来像はまったく同じものであった。周囲の威圧的な要請に屈したA男は、その未熟な性格のために発病することで現実から逃避し、さらに時日を経て自身の欲求を身近な環境への神経症的行動化の中で表現するようになった。一方、自我のより成長したB男は、進学や就職選択ではあくまでも自己の意志を貫き、家を継ぐことで周囲と妥協しながら精神の調和を保っている。

IV. 考 察

富山県の方言に「こうりゃく」と「みあらくもん」というのがある。前者は、『富山県方言』（図書刊行会、大正8年）によると「(富山県で)特に制作せりと覚しきもの」で、合力のなまりとされ、手伝いを意味する。これを実際に用いるときは、親戚や近隣が家屋の新改築、田仕事、冠婚葬祭などを行う際にその手伝いに行くこと指し、もう少し広義に用いて、自分の家屋や田畑の維持管理を手抜きなく行うことを併せ意味することもある。「みあらくもん」は「み(見)あらく(歩くのなまり)もん(者)」のこたらしく、用事もないのに方々をうろうろと見て歩く道楽者といった意味¹⁰⁾で、普通「みゃーらくもん」と発音される。ただ、この「みゃーらくもん」は単なる道楽者を指すだけでなく、たとえばB男が「病院の仕事で帰宅が遅くなり、こうりゃくの方が少しお

ろそかになるとみゃーらくもんに見られる」と苦笑するように、こうりやくをしかりしない人を軽蔑するときにも用いられる。

旧民法に成文化されていた伝統的な家族は、家長権の強い、直系家族を主軸とし、家族成員は個としてよりも家の一員として意識されていた。したがって家族成員は独立して家庭をもったあとでも自身の家庭を超えた「家」の意識に支配されることになるが⁴⁾、このような意識によって家の成員が果たす主要な行為の一つが富山ではこうりやくであり、それを怠ればみゃーらくもの烙印がおされる。

従来富山県の若者、とくに長男の立場にある若者が、家の後継と伝統的地縁・血縁紐帯の維持をいかに強く求められてきたかは、「こうりやく」という方言の存在がそれを象徴的に示しているといえるのではなからうか。もちろん若者の多くは自己に課せられた役割を肯定し伝統を継承していくのであって、その限りでは彼らが事例性を帯びてわれわれの前に浮かびあがってくることはない。しかし、彼らの中には大人たちの要請と自身の希望とのほさまに苦悩する者もいるはずである。A男とB男の場合がそれにあたる。

郷里を離れ、自己の志望する大学へ進もうという若者に対して、親と親族は彼が再び家に戻らなくなることを極度におそれ、そのような慣習的社会規範からの逸脱行為は悪であるとして強硬に反対した。威圧されそうになりながらもB男はただ頑なに首を横に振るのが精一杯の抵抗だったというが、その彼にしても大学卒業後は家を継ぐことで周囲と妥協しなければならなかったのである。B男に比べると人格の成熟が遅れ母親に依存的であったA男は、母子家庭という不利な条件もあって、親族の圧力に抗しきれなかった。

幼少年期を不遇な家庭環境の下で過ごしたA男にとって同一化を企てる父母の像は希薄なものでしかなかった。毎夜のように酔って乱暴をはたらく父親を幼いA男は恨んでいたし、夫の病的酩酊に悩まされながら世間体を重んじ、口さがない親戚や隣人の目から家庭を守るのに必死であった

母親は哀れな犠牲者にみえたという。こうした状況下で母子は互いに依存し、母親はA男に過度の愛情を注いだ。小学校に入ったころからA男は読書に夢中になるが、そこには彼にとって現実からの逃避という意味があったのかもしれない。彼の未熟で依存的な性格傾向と多少とも夢想的な人生観は、このような生育史を背景にして形成されたものと考えられる。彼には、周囲からの圧迫に対抗できるほどの逞しさはなく、その結果葛藤状況の中でヒステリーを発症したのである。

さて、この事例には、未熟で依存的な性格傾向、葛藤を象徴的に表現する転換症状、および疾病への意志（Wille zur Krankheit, Bonhoeffer³⁾）ないしは目的指向的（goal-oriented）色彩（西園⁸⁾）、などが明らかに具わっており、ヒステリーという病態を認める立場に立つ限りその臨床診断にさほどの疑義はないと思う。ただ、筆者は臨床症状のうち、転換症状に後続するかたちで発現した神経症的行動化に注目したい。

周囲の圧倒的な力の前に、抑圧された欲求は転換症状に象徴されたが、それは情緒的孤立状態での学業達成困難に対する合理化であると同時に、A男の消極的意思表示であった。留年を重ねてA男は25歳になったが、その間に友人ばかりでなく弟も社会に巣立っていった。周囲の干渉はしだいに少なくなったが、反面彼の孤立感と焦燥感は増大していったと思われる。こうした状況下でA男の家庭内暴力が始まったのである。

西園は神経症についての因子分析の結果、家出・徘徊、かんしゃく、暴力などの非・反社会的行動障害がヒステリー転換症状と1つの群をなしていることを明らかにし⁷⁾、それをもとに思春期、青年期の神経症性行動障害の多くはヒステリー機制にもとづく反応であろうと推定している⁸⁾。また、青年期神経症の時代的変遷を調べた西田⁶⁾は、ヒステリーの数量的減少傾向とともに病像全体の变化を指摘している。すなわち近年の青年期ヒステリーは、転換症状以外にさまざまな行動化を伴う例が多いという。したがってA男の行動もヒステリーの単なる一症状として理解することができる。

しかし、本来ヒステリーという病態には疾病逃避（第一次疾病利得）と症状を楯に周囲を動かす第二次疾病利得の特徴をみるのが一般的である。その場合、後者には受動的に装いながら周囲に影響を行使するタイプのほかに、自己の本意を直接言動に表出する能動的なタイプを含めてもよいと思う。この能動的自己表出は厳しい抑圧的社会状況下では二重人格、憑依状態を隠れ蓑にして行われる。厳格な戒律を強いられた中世の尼僧院で尼僧たちが憑依状態において種々の要求をしたのはその好例であろう¹³⁾。反対に抑圧的社会構造の後退は患者の自己表出を容易にする。このようにみえてくると、二重人格は現代文化と親和性がない⁹⁾とか、行動化を伴う青年期ヒステリーが増加傾向にある⁶⁾といった提言もごく自然に首肯し得る。

A男の臨床像はまさしく今日的ヒステリーのそれであるが、家庭内で暴力を振るうA男は弟によるとあたかも人が変わったかのようなだという。したがって、環境条件だけを半世紀前に戻すことができるとしたら、A男は、彼に憑依した何者か〜たぶん親鸞か蓮如〜の口を借りて東京への遊学を要求したのではないかと筆者は考えている。

V. まとめ

血縁関係を重視する社会で高卒後の進路をめぐり親・親族と対立した本家の長男A男（事例）とB男（対照例）を提示した。

- 1) 情緒的に未熟なA男は周囲の圧力に屈し、葛藤状況の中で転換症状を、さらに時日を経て家庭内暴力を発呈した。他方、自我のより成長したB男は周囲と妥協しながら自己の意志を貫き、心身の健康を保った。
- 2) A男にみられた家庭内暴力の観察を通じて、ヒステリーにおける第二次疾病利得と神経的行動化との関連について検討した。

文 献

- 1) 新垣元武：ヒステリーの時代的変遷。九神精医，10；71-95，1963。
- 2) Baeyer, W.v.: Zur Statistik und Form der abnormen Erlebnisreaktionen in der Gegenwart. Nervenarzt, 19; 402-408, 1948.
- 3) Bonhoeffer, K.: Wie weit kommen psychogene Krankheitsprozesse vor, die nicht der Hysterie zuzurechnen sind? Allg. Z. Psychiat., 68; 371-386, 1911.
- 4) 福武 直：日本社会の構造。東京大学出版会，東京，1981。
- 5) NHK放送世論調査所：日本人の県民性-NHK全国県民意識調査。日本放送出版協会，東京，1953。
- 6) 西田博文：青年期神経症の時代的変遷-心因と病像に関して。児童精神医学とその近接領域，9；225-252，1968。
- 7) 西園昌久：神経症の分類をめぐって。治療，5；2431-2437，1971。
- 8) 西園昌久：ヒステリーの臨床。臨床精神医学，9；1145-1156，1980。
- 9) 荻野恒一：文化構造と精神疾患。懸田編『現代精神医学大系25，文化と精神医学』所収，中山書店，東京，1980。
- 10) 大田栄太郎：越中の方言。北日本新聞社，富山，1970。
- 11) Schilder, P.: The concept of hysteria. Amer. J. Psychiat., 95; 1389-1413, 1939.
- 12) Windlinger, U.M.: Zum Wandel der kindlichen Hysterie. Acta Paedopsychiat., 42; 99-108, 1976.
- 13) 吉益脩夫：17世紀におけるヒステリー-性集団現象の流行について。犯罪誌，20；3-5，1954。

* 謝辞：この論文は「社会精神医学雑誌，9；121-127，1986。」に掲載されたものです。本誌への転載を認めていただいた星和書店に感謝いたします。